



TITLE:

慢性に経過した陰嚢内血瘤の1例

AUTHOR(S):

青木, 雅信; 石川, 晃; 牛山, 知己; 鈴木, 和雄; 藤田, 公生

CITATION:

青木, 雅信 ...[et al]. 慢性に経過した陰嚢内血瘤の1例. 泌尿器科紀要
1995, 41(10): 817-819

ISSUE DATE:

1995-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/115586>

RIGHT:

慢性に経過した陰嚢内血腫の1例

浜松医科大学泌尿器科学教室 (主任: 藤田公生 教授)

青木 雅信, 石川 晃, 牛山 知己

鈴木 和雄, 藤田 公生

A CASE OF CHRONIC SCROTAL HEMATOCELE

Masanobu Aoki, Akira Ishikawa, Tomomi Ushiyama,

Kazuo Suzuki and Kimio Fujita

From the Department of Urology, Hamamatsu University School of Medicine

A 60-year-old man visited our hospital because of a painless swelling of the left scrotal content which enlarged gradually for these five years. He had no history of trauma at the perineum. Tumor markers such as HCG, AFP and CEA were within normal limits. Left high orchiectomy was carried out after the admission under the diagnosis of suspicious testicular cancer. The resected mass, 16.5×12.5×9.5 cm in diameter and 900 g in weight, was encapsulated within the tunica vaginalis by a fibrous membrane and contained about 300 ml of reddish black liquid. The normally-appearing left testis was located separately from the mass. Microscopic examination revealed depositions of cholesterol crystals in the wall, which are characteristic for a chronic hematocele.

(Acta Urol. Jpn. 41: 817-819, 1995)

Key words: Hematoma, Hematocele, Intrascrotal mass, Chronic scrotal hematocele

緒 言

陰嚢が腫大する疾患に精巣腫瘍、陰嚢水腫、外傷性の血腫などがある。今回われわれは、5年前から慢性に経過した陰嚢内血腫の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告するとともに本邦報告例29例につき臨床的検討を加えた。

症 例

患者: 60歳, 男性

主訴: 左陰嚢内容の腫大

家族歴: 特記すべきことなし

既往歴: 10年前より高血圧

現病歴: 1989年左陰嚢内容の腫大に気付いた。陰部外傷の既往もなく、無症状のため放置していたが、しだいに増大したため、1994年9月27日近医を受診。超音波断層像で左精巣腫瘍が疑われ、9月28日当科を紹介され受診。10月4日精査治療目的で入院した。

入院時現症: 身長 167.8 cm, 体重 74.95 kg。栄養状態良好, 表在リンパ節触知せず。胸腹部理学的所見に異常を認めず。左陰嚢内容は超手拳大に腫大し表面は平滑で弾性硬, 圧痛はなく, 透光性および波動性を

認めなかった。

入院時検査成績: 検尿: 蛋白(±), 糖(-), 潜血(-), 沈渣異常なし。尿細胞診: class I。血算, 血液生化学, 腫瘍マーカー, 出血凝固系に特に異常は認めなかった。超音波断層像で左陰嚢内容は全体にhyperechoicでほぼ均一構造の腫瘤として描出された(Fig. 1)。

以上より, 精巣腫瘍, 特発性の陰嚢内血腫, 陰嚢水腫などが考えられたが確定診断には至らず, また腫瘍マーカーは正常だったが精巣腫瘍が否定できなかったため, 1994年10月7日, 硬膜外麻酔下に左高位精巣摘除術を施行した。手術所見: 左鼠径管にそった皮切を置き, 内鼠径輪の高さで精索を処理し, 左陰嚢内容を摘出した。陰嚢皮膚との癒着が強かった。

摘出標本: 摘出物は大きさが 16.5×12.5×9.5 cm, 重量が 900 g であり, 剖面で腫瘤は肥厚した白色の線維性被膜で覆われており赤褐色の液体が約 300 ml 流出した。また, 腫瘤の近傍に大きさ 2.8×1.4×1.8 cm, 黄白色, 弾性軟の左精巣を認めた(Fig. 2)。

病理所見: 肥厚した総漿膜には線維化や炎症細胞浸潤を伴った結合織が増生し, 出血層にはコレステリン結晶が見られ組織学的に陰嚢内血腫と診断された。



Fig. 1. Ultrasonography visualized a round hyperechoic mass.



Fig. 2. The mass was encapsulated by a fibrous membrane. The testis was normal (the upper cut surface).

(Fig. 3). 精巣は正常であった。術後、創部にMRSA感染を起したが抗生剤投与にて軽快し術後29日目に退院した。

考 察

陰嚢内血腫は精巣固有漿膜腔内の血液貯留と定義され、通常、外傷や陰嚢穿刺後に発症し、泌尿器科外傷の約3%を占める¹⁾。動脈硬化、糖尿病、新生物、局所

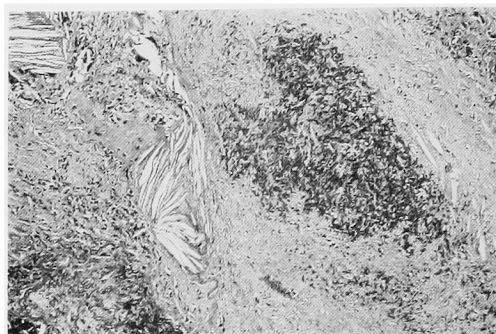


Fig. 3. Microscopic examination revealed fibrosis, hemorrhage and deposition of cholesterol crystals.

の炎症等の基礎疾患が誘因になったり特発性に形成されることもある²⁾。急性の経過をとることが多く、漿膜腔内に出血しても吸収機転が働き、本症例のように慢性の経過をとる事は稀である。われわれが調べたかぎり、同様の症例が陳旧性陰嚢内血腫として本邦で28例報告されており³⁾、自験例は29例目である。本症例は、病理組織学的に器質化した古い出血巣から比較的新しい出血巣まで段階的に見られたことから、出血が繰り返して起っていたことを裏付けており陳旧性ではなく慢性という表現が適していると考えた。本邦29例の初診時の年齢の平均は64.4歳で本症は50歳以上に多く見られた。患側は左が22例、右が7例と左側に多かった。これは解剖学的に左精巣静脈が腎静脈に流入している事が関与している可能性が示唆された。罹病期間は10年以上経過したものが全体の8割を占めていた。この原因として陰嚢内容の腫大以外に疼痛等の症状がないために羞恥心により受診の機会が遅れることなどが考えられる^{1,3,5)}。

診断に関しては精巣腫瘍との鑑別が最も重要であるが、自覚症状、触診所見等からの鑑別は困難である。画像診断学的には超音波断層法、CT、MRIが用いられるが、特に超音波断層法は精巣の形態を容易に描出できるため有用と考えられている^{1-4,6,8)}。Schaffer¹¹⁾やCunningham¹²⁾は急性の陰嚢内出血の場合は内部が不均一なエコー像を呈しその後徐々に均一な低エコー像に変化するとしている。しかし、発症から時間を経たものについては、急性出血と異なり精巣腫瘍との鑑別は一般的に困難である。したがって本邦報告例の大多数は精巣腫瘍を念頭において高位精巣摘除術が施行されている。自験例の場合も、腫瘍マーカーは正常であったが精巣腫瘍が完全に否定できず高位精巣摘除術を施行した。

結 語

慢性に経過した陰嚢内血腫の1例について報告した。自験例は本邦29例目と思われた。

本論文の要旨は、第187回日本泌尿器科学会東海地方会において報告した。

文 献

- 1) 本間次郎, 足立陽一, 岩淵正之, ほか: 陳旧性陰嚢内血腫の1例. 西日泌尿 56: 1423-1426, 1994
- 2) 国枝 学, 山口 聡, 西原正幸, ほか: 巨大陳旧性陰嚢内血腫の1例. 西日泌尿 55: 1611-1614, 1993
- 3) 宮澤克人, 池田龍介, 津川龍三, ほか: 陳旧性陰嚢血腫の1例. 臨泌 47: 786-788, 1993
- 4) 萩原雅彦, 小関清夫, 高岩正至: 非外傷性陳旧性陰嚢血腫の1例. 西日泌尿 55: 458-460, 1993
- 5) 郷司和男, 蓮沼行人, 高木伸介, ほか: 陳旧性陰嚢血腫の1例と本邦報告例の臨床的検討. 泌尿紀要 38: 1413-1415, 1992
- 6) 水谷陽一, 宮川美栄子: 特発性と考えられた陳旧性陰嚢血腫の1例. 泌尿紀要 37: 199-201, 1991
- 7) 酒井善之, 小宮山斉: 陰嚢潰瘍を伴う陳旧性陰嚢血腫の1例. 泌尿器外科 6(8): 747-748, 1993
- 8) 一ノ瀬義雄, 黒川公平, 高橋博朋, ほか: 巨大陳旧性陰嚢血腫の1例. 臨泌 46: 704-706, 1992
- 9) 実藤 健: 巨大陳旧性陰嚢血腫の1例. 臨泌 42: 465-467, 1988
- 10) Schaffer RM: Ultrasonography of scrotal trauma. Urol Radiol 7: 245-249, 1985
- 11) Cunningham JJ: Sonographic findings in clinically unsuspected acute and chronic scrotal hematoceles. AJR 140: 749-752, 1983

(Received on April 20, 1995)
(Accepted on June 10, 1995)